「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 2 回（7 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、承諾を得ています。

覆った巣の下に無事な卵があるはずはない
年の差を忘れる文化交流

吉林省　孫浩宇

私には大唐の夢と、日本への情がある。仕事と学術的関心が偶然一致したため、私と、日本の学者で、有名な漢文学者である岡村繁先生には、年の差を忘れる文化交流がある。

13 年前、私は大学を卒業して今の仕事に就き、唐詩と『昭明文選』の研究に着手した。驚くべきことに、この大学は、省属の普通の大学でありながら『文選』研究の優れた伝統を持っていた。小さな研究室に入ると、この研究室は国内外に影響力があるということを同僚から紹介された。それを聞いて、少し疑問に思い、ふと回りを見渡して、私は、ようやくこの小部屋が人を引きつける魅力を持っていることに気付いた。本棚には国内外の古典籍の貴重本が並んでおり、その中に日本の学者である斯波六郎の名作『文選索引』があった。向かいの壁には 1 メートル四方の書が飾られていて、更に目を引いた。かなり垢抜けた字体には円やかさと潤いがあり、逞しさも見え、一見してただ者の作品ではないと分かった。これこそ岡村先生の貴重な書—彼がこの研究室を訪問された時に残したものだったのである。しかし、当時の私は、彼が斯波六郎先生の教え子で、著名な「京都学派」の創始者、鈴木虎雄の孫弟子であることをまだ知らなかったのである。

「一衣帯水の扶桑の意、千載の文脈の九州の情。」この“文脈”は、当然、岡村先生の好まれる中国の文化と文学を指すものであり、“九州”は、一語で二つの意味を持っており、先生は九州大学の教授なのである。この連句には中国の伝統的な文人気質が非常にあって、岡村先生の中華文化に対する傾慕と深い情を具現している。

こうした部屋で働いていると、私は、伝統を継承する責任と光栄を感じ、また文章の中で岡村先生との「心の交流」を始め、彼の観点と方法から多くの啓発を受けた。そして想像も付かなかったことに、程なく先生とお目にかかることができたのだが、その時の出会いには心残りも多々あった。

2000 年の夏、1 つの重要な学術会議（第 4 期「文選学」国際学術シンポジウム）が私の職場で開催され、私は連絡と接待を担当した。私は岡村先生を含む多くの学者に招待状を出したが、岡村先生からの返信は早く、そこには、美しくそろった楷書の小さな字で「ゆかりの地の再訪をとても待望しています」と書かれていた。岡村先生と私の職場には数年来の学術交流があり、先生には何度かご来訪いただいたことがある。先生の精致な手紙を頂いて、私はとても興奮し、会議の日をとても心待ちにしていた。

ついに、岡村先生が約束どおり書を残された部屋にお越しになり、私たちは会うことができたのである。清潔感あるシャツ、整った髪、お顔にはつやがあり、80 歳近いお年寄りのようには見えなかった。先生の手を握っていると、私は夢の中にいるようであり、敬慕して久しい異国の学者が目の前に現れたことで、私の感動は激しく沸き立った。私は岡村先生の学問、名声に感動し、また、共通項である中国文学に対する心からの愛にも感動した。しかし、私が、彼から何日か教えを請おうと思い付いた時、岡村先生はあまり中国語ができないということが分かり驚かされたのだが、このことで、逆に、自分が日本語を分からないことについて長らく悩むことにもなったのである。

残りの時間に私ができたことは、彼の身の回りの面倒を見て差し上げることしかなく、このことがあの時の出会いで最大の心残りであったと言わざるを得ない。岡村先生をお見送りして、自分の気持ちが落ち着いた頃、私は、日本の学者が中国文化を研究する精神は驚くべきものであるとふと思った。意外にも中国語を話せない人が有名な中国古典文学者になれるとは、実に不思議である。日本では昔から多くの人が漢字を書けるが、中国語は話せないということを後に知り、私は、少しだけ納得した気持ちになった。

いずれにせよ、その時の出会いから、岡村先生との付き合いが始まったのである。翌年の元旦、郵便物をやりとりした時、岡村先生は会議の際のある細かいことにはっきりと言及し、更に謝意も述べておられたのだが、実は、それは全て私達の仕事だったのである。それから文字をやりとりする中で、私は岡村先生の学問の堅固さと人となりの謙虚さに気がついた。たとえ私のような若輩者に対してでも、先生は人の師になりたがらず、いつも探求する口ぶりでおられ、それは、先生が文章で思い切った新説を提示されるのとはまるで違うものであった。見たところ、同じように中国の文学を研究していても、両国の学風はやはり少し違うのである。

最も感動したのは 2008 年に起きた出来事だった。その年、私は『文選』に関する小書を編纂したのだが、岡村先生はこの分野の専門家であり、書道にも長けておられるので、書名の題箋をお願いしようと急に思い立ったのである。活字原稿を送ると、先生はまたとても早く返信して下さり、横と縦の 2 つ題箋を書いて下さった。私をひとしきり褒め称えた後で一言「元来うまく字を書けないもので、恐縮です。」と添えられており、それは、8 年前、続けざまに「有難うございます」と口にされたお年寄りにまた会ったかのようだった。手を貸したのが彼ではなく私であったかのように。その題箋のおかげで、小書はかなり輝きを増したが、そのご恩は心に留めておくことしかできない。

先生の書の前に座ると、どうしても感慨を覚える。世の中は変転し、次から次へと混乱しているが、共通の文化の輪は重視する価値がある。公務か個人的な交際かを問わず、先生には本当に頭が下がる。彼の中国の文化に対する感情、研究する精神は、いずれも私達若者の模範であり励みである